

令和6年度

上川農業試験場年報

令和7年10月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部

上 川 農 業 試 験 場

目 次

I 概 要	1
1. 沿 革	1
2. 施設及び試験圃場	1
3. 機 構	2
4. 職員の配置	3
5. 職 員	3
1) 現在員	3
2) 転入者	3
3) 転出者及び退職者	4
6. 支出決算額	4
7. 新たに設置した主要施設及び備品	4
II 作 況	5
1. 気象概況	5
2. 作 況	7
1) 各作物の耕種概要	7
2) 各作物の作況	7
(1) 水 稻	7
(2) 秋まき小麦	9
(3) 春まき小麦	10
(4) 大 豆	11
(5) 小 豆	12
(6) ばれいしょ	13
III 試験研究及び地域支援活動	14
1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要	14
1) 水稻畑作グループ	14
2) 生産技術グループ	14
2. 各グループの試験研究課題	14
1) 水稻畑作グループ	14
2) 生産技術グループ	17
3. 地域支援活動	19
1) 地域農業技術支援会議	19
2) 道北地域農業技術センター連絡協議会（NATEC）	19
3) 上川水稻直播ネットワーク	19

IV	試験研究の成果と普及	20
1.	技術普及に移された成果	20
1)	普及奨励事項	20
2)	普及推進事項	20
3)	指導参考事項	20
4)	研究参考事項および行政参考事項	20
2.	論文ならびに資料	21
1)	研究論文、試験成績	21
2)	口頭・ポスター発表	21
3)	専門雑誌、著書・資料	22
4)	新聞等記事	22
5)	印刷刊行物	22
3.	研修生の受入	22
1)	普及指導員研修	22
2)	学校教育研修・職場体験学習	23
3)	JICA 研修	23
4)	その他	23
4.	技術相談及び技術指導	23
1)	技術相談	23
2)	技術指導	24
5.	講師等の派遣	26
6.	関連委員会・学会研究会役員	26
V	広報・場運営・その他	27
1.	広 報	27
1)	一般参観来場者	27
2)	公開デー	27
3)	新技術発表会	27
4)	マスコミ等への対応	27
5)	イベント等への出展	28
2.	場運営	28
1)	場内委員会	28
2)	諸会議	28
3)	職員の研修	29
4)	表彰および学位授与	30
3.	自己点検への対応	31

I 概 要

1. 沿 革

当場は、明治 19 年に旧神居村忠別（現旭川市神居 1 条 1 丁目）に忠別農作試験所として発足し農作物栽培の適否を試みたのを始めとする。この試験所は、翌年上川仮道路開削に従事する樺戸集治監忠別出張所に引き継がれた。明治 22 年道庁は屯田兵及び移住民に蚕桑の業を授け、かたわら農作物を試作する忠別農作試験所（現旭川市 1 条 2、3 丁目）を復活した。明治 30 年に旭川村 6 条 11 丁目（現旭川東高校敷地）に、さらに明治 37 年には旭川の市街拡張のため永山村（現旭川市永山 6 条 18 丁目）に移転し、平成 5 年度末までの 90 年間にわたって各種の試験を行った。翌平成 6 年度からは現在地（上川郡比布町南 1 線 5 号）の新庁舎、新圃場での試験を開始した。

長い歴史の間に名称や機構も変遷し、昭和 25 年には農業試験研究機関の整備統合で、従来の試験研究が国立と道立に二分されたのに伴い、当場は道費支弁の北海道農業試験場上川支場となり、さらに昭和 39 年 11 月、本道の農畜一体とした試験研究を行うため機構改革が実施され、当場は北海道立上川農業試験場と改称された。

試験業務については、従来の蚕桑中心の試験から明治 27 年には一般畑作の試験に移り、さらに明治 33 年からは水稻も取り上げられるようになった。明治 37 年永山村に移転してからは水稻に関する試験が多くなり、それらの成果は広く普及された。大正 4 年からは水稻の本格的品種改良試験が開始された。その結果、大正時代には「坊主」系統が広く栽培され、昭和 10 年に有名な「富国」ができるまで「坊主」の時代が続いた。その後、戦前戦後を通じ数多くの優良品種を育成し、名実ともに当場は本道稲作に関する中心的試験機関となった。

なお、昭和 2 年より昭和 21 年まで地方債事業として、農林省指定による水稻新品種育成試験を実施し、その後、昭和 22 年より 25 年まで札幌農事改良実験所上川試験地が併置されていた。昭和 41 年には農林省の全額助成による水稻指定試験が再度設置され、昭和 44 年には普及事業の強化にともない専門技術員が配置された。

一方、北海道立農業試験場原々種の生産事業が士

別村東山で昭和 29 年から始められ、昭和 31 年に女満別分場の廃止と同時に北海道立農業試験場原々種農場士別分場が発足した。昭和 33 年には北海道立農業試験場上川支場畑作科が併置され、畑作試験に着手した。昭和 34 年に北海道原々種農場士別分場を廃止すると共に、北海道立上川農業試験場畑作科と改称した。昭和 62 年には、農業試験研究機関の機構改正により園芸部門を強化し畑作園芸科と改称し、平成 4 年度からは畑作科と園芸科に分離し一層の強化を図った。その後、平成 5 年度末の本庁舎移転に伴い士別市の畑作科、園芸科も現在地に統合された。

本庁舎の比布町への移転整備経過は、平成元年 9 月に現在地への移転が決定され、平成 3 年度に圃場整備、平成 4 年度に庁舎及び付属施設建設工事に着手し、平成 6 年 8 月末に外構工事を含め完成した。

平成 18 年度の機構改正により天北農業試験場は廃止の上、上川農業試験場天北支場とされた。

平成 22 年 4 月には地方独立行政法人北海道立総合研究機構が発足し、22 の道立試験研究機関が移行して、当場は農業研究本部上川農業試験場となった。この機構再編ではグループ制が導入され、水稻、生産環境、地域技術の 3 グループが設置されたほか、道職員である農業改良普及員は道農政部生産振興局技術普及課に所属の上、上川農試駐在という形となり、技術普及室が置かれた。

平成 30 年 7 月、根釧農業試験場の酪農試験場への改称に伴い、天北支場は酪農試験場天北支場となった。

令和 2 年 4 月、機構再編により生産環境と地域技術の両グループが統合され、生産技術グループとなった。

令和 5 年 4 月、水稻グループが生産技術グループの畑作に係る業務の移管にともない水稻畑作グループと改称された。

2. 施設及び試験圃場

1) 位置と土壤条件

当場は、上川郡比布町の基線（国道 40 号線）と町道南 1 線、町道 5 号と 6 号に囲まれた面積約 28.5

ha の方形の用地で、その標高は 160m 前後である。中央には用地を東西に二分する形でウツペツ工場川が流れており、東方約 700m には石狩川がある。分布する土壌は褐色低地土で、一部は礫層が地表下 30～60 cm に現れる礫質褐色低地土である。試験圃場造成前の土地利用は水田、宅地、農道等であった。

試験圃場造成に当たり、農道は殆どそのままの位置で新しい農道を造成した。試験圃場は、表土部分を取り除き、水田は心土均平を、畑圃場は心土部分の厚さ 30 cm の石礫除去を行った後、表土戻しをした。

造成された試験圃場の代表的な土壌条件は、水田では細粒褐色低地土・造成相、また畑圃場は礫質褐色低地土・造成相である。

2) 施設、圃場の利用区分と面積

施設	(㎡)
庁舎	2,804
吹抜小屋	214
車庫	179
バイオテクノロジー研究棟	2,147
人工気象棟・ガラス網室	459
給油所	3
昆虫飼育実験棟	282
参観者便所	27
共同作業棟	916
共同調査棟	907
冷水田ポンプ舎	63
水田ポンプ舎	20
畑かんポンプ舎	11
農機具庫	907
外便所(2)	72
研究資材棟	907
乾燥庫	214
その他	279
施設合計	10,411

試験圃場	(ha)
水田関係	14.05
水田	9.99
(内冷水田)	1.05
農道・畦畔	2.85
用排水路	0.29
施設・用地など	0.92
畑関係	9.52
畑	7.81
農道	1.13
枠試験地	0.19
堆肥場	0.20
施設・用地など	0.15
排水路	0.04
建物敷地	4.83
用地合計	28.40

3) 土地利用及び施設・圃場の配置

(土地利用・施設・圃場の配置図)



- ① 庁舎
- ② 温室・人工気象室
- ③ 調査・作業棟
- ④ 昆虫飼育実験棟
- ⑤ 精密枠試験圃
- ⑥ 圃場内施設

3. 機 構

総務課：予算・給与・財務、理事長印・文書の管理、自動車及び施設等の使用・管理に関するものを行う。その他各グループの主管に属さないものを行う。

研究部

水稲畑作グループ：水稲の品種育成、畑作物に関する試験研究・調査、除草剤の試験、研究及び調査を行う。作業計画、労務及び業務用諸施設の管理を行う。

生産技術グループ：水稲の栽培及び品質、土壌肥料および土壌環境、病害虫及び園芸作物、に関する試験、研究及び調査を行う。地域農業技術の支援、農業研究情報の提供と専門技術の調査研究、開発された技術の体系化と普及定着、に関するものを行う。

4. 職員の配置（令和7年3月31日現在）

	法人職員	道派遣	再雇用	計	備 考
場 長	1			1	
研 究 部 長	1			1	
総 務 課 長		5		5	
水 稲 畑 作 G	1 0		1	1 0	
生 産 技 術 G	1 0		2	1 0	
合 計	2 2	5	2	2 7	再雇用は内数

5. 職 員

1) 現在員（令和7年3月31日現在）

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	吉 村 康 弘	研 究 主 幹	笛 木 伸 彦
研 究 部 長	谷 藤 健	主 査（栽培環境）	熊 谷 聡
総 務 課 長	森 光 治	主任主査（病虫）	長 濱 恵
主 査（総務）	伊 東 良 浩	主任主査（地域支援）	内 田 哲 嗣
主 査（調整）	兼 山 幸 記	研 究 主 査	野 田 智 昭
技 師	有 村 優 季	研 究 主 任	栢 森 美 如
技 師	堀 川 愛 花	研 究 職 員	佐 々 木 大 介
研 究 主 幹	尾 崎 洋 人	研 究 職 員	竹 内 悠 真
主 査（水稲）	木 下 雅 文	専門研究員（再雇用）	中 村 隆 一
主 査（畑作）	藤 田 涼 平	専門研究員（再雇用）	古 川 勝 弘
研 究 主 任	森 田 耕 一		
研 究 主 任	堀 川 謙 太 郎		
研 究 職 員	高 橋 春 南		
研 究 職 員	佐 々 木 瞭 太		
専 門 主 任	中 川 諭		
主 任	檜 村 優		
主 任（再雇用）	笹 木 正 志		

2) 転入者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研 究 主 幹	笛 木 伸 彦	R6. 4. 1	北見農業試験場から
主 査（栽培環境）	熊 谷 聡	〃	中央農業試験場から
研 究 主 任	藤 田 一 輝	〃	十勝農業試験場から
研 究 職 員	高 橋 春 南	R6. 4. 16	十勝農業試験場から

3) 転出者及び退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研 究 主 幹	後 藤 英 次	R6. 4. 1	中央農業試験場へ
主 査 (栽 培 環 境)	唐 星 児	〃	北見農業試験場へ
研 究 主 任	粕 谷 雅 志	〃	中央農業試験場へ
研 究 主 任	齋 藤 優 介	〃	中央農業試験場へ
研 究 主 任	藤 田 一 輝	R6. 6. 30	退職
主 査 (園 芸)	古 山 真 一	R6. 11. 30	退職
研 究 主 任	栢 森 美 如	R7. 3. 31	退職

6. 支出決算額

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決 算 額	残 額
戦 略 研 究 費	1,200,000	1,200,000	1,175,458	24,542
重 点 研 究 費	1,885,000	1,885,000	1,798,077	86,923
職 員 研 究 奨 励 費	0	0	0	0
経 常 研 究 費	14,959,000	15,618,000	15,387,822	230,178
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	0
技 術 普 及 指 導 費	222,000	288,100	283,330	4,770
研 究 用 備 品 整 備 費	0	2,420,000	2,420,000	0
維持管理経費 (研究)	725,000	8,105,000	8,068,985	36,015
維持管理経費 (一般)	47,798,000	47,798,000	46,124,292	1,673,708
知 的 財 産 経 費	0	0	0	0
運 営 経 費	31,718,000	31,989,530	30,072,096	1,917,434
共 同 研 究 費	1,700,000	2,100,000	2,100,000	0
国 庫 受 託 研 究 費	1,280,000	1,481,000	1,481,000	0
道 受 託 研 究 費	3,960,000	3,758,000	3,757,546	454
その他受託研究費	27,567,000	26,666,083	26,666,083	0
施設整備費補助金	0	0	0	0
施設整備費 (繰越積立金)	0	29,704,000	29,703,300	700

7. 新たに設置した主要施設及び備品

品 名	型 式	数 量	金 額 (円)
バイオクリーンベンチ	日立 PCV-1607BNG	1 台	2,420,000
トラクター	ヤンマー US50	1 台	7,535,000

Ⅱ 作 況

1. 気象概況

《令和5年（2023年）》

11月：平均気温は1.9℃高く、降水量は平年の136%、日照時間は平年の88%であった。

12月：平均気温は0.9℃低く、降水量は平年の117%、日照時間は平年の69%であった。

《令和6年（2024年）》

1月：平均気温は1.1℃高く、降水量は平年の113%、日照時間は平年の93%であった。

2月：平均気温は0.1℃低く、降水量は平年の44%、日照時間は平年の129%であった。

3月：平均気温は2.4℃低く、降水量は平年の81%、日照時間は平年の105%であった。

4月：平均気温は2.4℃高く、降水量は平年の65%、日照時間は平年の97%であった。

5月：平均気温は0.2℃低く、降水量は平年の107%、日照時間は平年の91%であった。

6月：平均気温は0.9℃高く、降水量は平年の75%、日照時間は平年の104%であった。

7月：平均気温は0.6℃高く、降水量は平年の181%、日照時間は平年の104%であった。

8月：平均気温は2.1℃高く、降水量は平年の80%、

日照時間は平年の104%であった。

9月：平均気温は0.1℃高く、降水量は平年の68%、日照時間は平年の128%であった。

10月：平均気温は1.3℃高く、降水量は平年の103%、日照時間は平年の111%であった。

本年の根雪終は4月8日で平年より1日遅く、積雪期間は1日短く、耕鋤始（融雪剤散布圃場）は4月26日で平年より8日遅かった（表1）。令和5年11月から令和6年10月までの気象は表2のとおりである。

以上、農耕期間の4～10月についてまとめると、平均気温は5月、9月が平年並で、4月、6月、7月、8月、10月がそれぞれ2.4℃、0.9℃、0.6℃、2.1℃、1.3℃平年より高かった。降水量は10月が平年並で、5月、7月が平年の107～181%と多く、4月、6月、8月、9月が平年の65～80%と少なかった。日照時間は4月、6月、7月、8月が平年並で、9月が平年の128%と多く、5月が平年の91%と少なかった。5～9月までの積算値は、平年に比べて平均気温が100.2℃高く、降水量が17.3mm多く、日照時間が46.1時間多かった（表3）。

表1 季節表

	初霜 (前年)	降雪始 (前年)	根雪始 (前年)	根雪終 (月日)	積雪期間 (日)	降雪終 (月日)	耕鋤始 (月日)	晩霜 (月日)	初霜 (月日)	降雪始 (月日)
本年	10月24日	10月21日	11月25日	4月 8日	5月15日	5月 8日	4月26日	未観測	10月10日	10月19日
平年	10月 9日	10月26日	11月23日	4月 7日	5月16日	4月22日	4月18日	5月13日	10月12日	10月26日
比較	15	-5	2	1	△ 1	16	8	—	-2	△ 7

注1) 本年は2023～2024年の値。

2) 根雪始、根雪終、積雪期間、耕鋤始は比布圃場の観測値。平年は過去10か年の平均値。

3) 初霜、降雪始、降雪終、晩霜は旭川地方気象台による旭川市の観測値。晩霜は2020年から観測中止。

4) 初霜、降雪始、降雪終の平年は過去10か年の平均値。晩霜の平年は2011～2020年の平均値。

5) △印は平年に比べて早または短であることを示す。

表2 気象表（旬別）

年月	旬	平均気温（℃）			最高気温（℃）			最低気温（℃）			降水量（mm）			降水日数（日）			日照時間（hrs）		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
2023年 11月	上旬	8.3	4.8	3.5	13.9	9.2	4.7	2.2	0.7	1.5	61.5	33.6	27.9	7.0	6.1	0.9	26.2	23.3	2.9
	中旬	2.5	1.8	0.7	5.9	5.7	0.2	-0.5	-1.9	1.4	29.0	37.3	▲8.3	7.0	6.5	0.5	15.1	21.1	▲6.0
	下旬	0.6	-0.8	1.4	4.2	2.7	1.5	-2.9	-4.6	1.7	45.5	29.1	16.4	7.0	6.9	0.1	13.3	17.8	▲4.5
平均または合計		3.8	1.9	1.9	8.0	5.9	2.1	-0.4	-1.9	1.5	136.0	100.0	36.0	21.0	19.5	1.5	54.6	62.2	▲7.6
12月	上旬	-3.0	-3.0	0.0	1.8	0.1	1.7	-10.0	-6.7	▲3.3	14.5	25.7	▲11.2	6.0	6.8	▲0.8	9.6	14.4	▲4.8
	中旬	-6.3	-4.5	▲1.8	-3.8	-1.2	▲2.6	-10.1	-9.0	▲1.1	51.0	22.3	28.7	9.0	7.1	1.9	8.7	15.0	▲6.3
	下旬	-7.0	-5.9	▲1.1	-3.9	-2.6	▲1.3	-12.2	-10.2	▲2.0	18.0	23.6	▲5.6	8.0	8.1	▲0.1	12.7	15.3	▲2.6
平均または合計		-5.4	-4.5	▲0.9	-2.0	-1.2	▲0.8	-10.8	-8.6	▲2.2	83.5	71.6	11.9	23.0	22.0	1.0	31.0	44.7	▲13.7
2024年 1月	上旬	-6.4	-7.8	▲1.4	-2.5	-4.1	1.6	-13.3	-13.0	▲0.3	17.5	17.9	▲0.4	5.0	6.1	▲1.1	20.7	16.6	4.1
	中旬	-9.2	-8.5	▲0.7	-4.0	-4.2	0.2	-16.3	-13.9	▲2.4	8.0	12.2	▲4.2	4.0	4.0	0.0	38.5	24.1	14.4
	下旬	-5.6	-8.3	2.7	-2.1	-3.9	1.8	-9.7	-14.0	4.3	23.5	13.1	10.4	6.0	5.7	0.3	6.8	30.0	▲23.2
平均または合計		-7.1	-8.2	1.1	-2.9	-4.1	1.2	-13.1	-13.6	0.5	49.0	43.2	5.8	15.0	15.8	▲0.8	66.0	70.7	▲4.7
2月	上旬	-10.2	-3.1	▲4.5	-4.4	-4.4	0.0	-16.9	-15.2	▲1.7	8.0	11.0	▲3.0	4.0	4.7	0.3	32.6	30.3	2.3
	中旬	-2.0	-5.6	3.6	3.5	-1.5	5.0	-8.0	-10.5	2.5	8.0	17.2	▲9.2	6.0	5.3	0.7	33.7	27.7	6.0
	下旬	-8.9	-5.9	▲3.0	-3.7	-0.9	▲2.8	-15.3	-12.4	▲2.9	1.0	10.2	▲9.2	1.0	3.8	▲2.8	51.1	32.7	18.4
平均または合計		-7.0	-6.9	▲0.1	-1.5	-2.3	0.8	-13.4	-12.7	▲0.7	17.0	38.4	▲21.4	13.0	13.8	▲0.8	117.4	90.7	26.7
3月	上旬	-7.6	-3.1	▲4.5	-1.3	1.5	▲2.8	-14.8	-8.9	▲5.9	21.0	18.4	2.6	5.0	4.8	0.2	46.4	37.6	8.8
	中旬	-2.6	-1.0	▲1.6	2.3	4.0	▲1.7	-8.9	-6.8	▲2.1	8.0	12.9	▲4.9	2.0	3.3	▲1.3	39.0	48.5	▲9.5
	下旬	-0.1	1.0	▲1.1	5.0	6.5	▲1.5	-6.1	-4.7	▲1.4	7.0	13.4	▲6.4	3.0	4.1	▲1.1	72.0	64.1	7.9
平均または合計		-3.4	-1.0	▲2.4	2.0	4.0	▲2.0	-9.9	-6.8	▲3.1	36.0	44.7	▲8.7	10.0	12.2	▲2.2	157.4	150.2	7.2
4月	上旬	3.8	3.0	0.8	10.0	8.0	2.0	-2.3	-2.3	0.0	4.0	16.1	▲12.1	3.0	3.6	▲0.6	69.0	56.3	12.7
	中旬	9.3	4.9	4.4	17.4	11.0	6.4	2.5	-1.0	3.5	0.0	15.4	▲15.4	0.0	3.6	▲3.6	63.4	61.7	1.7
	下旬	9.9	7.9	2.0	16.1	14.4	1.7	3.7	1.1	2.6	25.0	13.1	11.9	2.0	3.2	▲1.2	49.5	69.8	▲20.3
平均または合計		7.7	5.3	2.4	14.5	11.1	3.4	1.3	-0.7	2.0	29.0	44.6	▲15.6	5.0	10.4	▲5.4	181.9	187.8	▲5.9
5月	上旬	9.5	10.4	▲0.9	15.8	16.7	▲0.9	2.9	4.1	▲1.2	30.0	27.3	2.7	2.0	4.5	▲2.5	66.4	55.7	10.7
	中旬	15.9	12.9	3.0	22.2	19.3	2.9	8.8	6.8	2.0	19.0	20.5	▲1.5	2.0	3.3	▲1.3	82.0	71.0	11.0
	下旬	12.0	14.8	▲2.8	17.1	21.1	▲4.0	7.0	8.9	▲1.9	30.0	26.2	3.8	4.0	4.6	▲0.6	37.0	77.1	▲40.1
平均または合計		12.5	12.7	▲0.2	18.4	19.0	▲0.6	6.2	6.6	▲0.4	79.0	74.0	5.0	8.0	12.4	▲4.4	185.4	203.8	▲18.4
6月	上旬	15.5	15.2	0.3	22.0	21.3	0.7	9.9	9.8	0.1	16.0	22.8	▲6.8	4.0	3.9	0.1	65.8	62.2	3.6
	中旬	19.3	16.6	2.7	24.8	22.1	2.7	14.7	11.9	2.8	29.5	31.0	▲1.5	6.0	4.3	1.7	53.6	54.8	▲1.2
	下旬	17.8	18.1	▲0.3	23.4	23.6	▲0.2	12.8	13.3	▲0.5	22.0	36.6	▲14.6	4.0	4.0	0.0	58.9	54.9	4.0
平均または合計		17.5	16.6	0.9	23.4	22.3	1.1	12.5	11.7	0.8	67.5	90.4	▲22.9	14.0	12.2	1.8	178.3	171.9	6.4
7月	上旬	20.3	19.8	0.5	25.7	25.5	0.2	15.8	15.2	0.6	33.0	42.3	▲9.3	6.0	3.5	2.5	52.8	59.9	▲7.1
	中旬	22.7	21.4	1.3	29.6	27.3	2.3	17.0	16.9	0.1	9.0	31.1	▲22.1	3.0	4.0	▲1.0	96.0	60.5	35.5
	下旬	22.9	22.9	0.0	28.4	28.6	▲0.2	18.9	18.2	0.7	195.5	58.1	137.4	7.0	3.5	3.5	48.7	70.1	▲21.4
平均または合計		22.0	21.4	0.6	27.9	27.1	0.8	17.2	16.8	0.4	237.5	131.5	106.0	16.0	11.0	5.0	197.5	190.5	7.0
8月	上旬	23.8	22.2	1.6	29.4	28.0	1.4	19.2	17.7	1.5	9.5	80.7	▲71.2	5.0	4.3	0.7	47.3	57.0	▲9.7
	中旬	23.0	20.5	2.5	30.0	25.8	4.2	18.0	16.2	1.8	39.0	65.2	▲26.2	6.0	4.9	1.1	75.7	50.3	25.4
	下旬	21.9	19.8	2.1	27.1	25.6	1.5	17.6	15.0	2.6	101.0	40.2	60.8	8.0	4.8	3.2	47.3	57.1	▲9.8
平均または合計		22.9	20.8	2.1	28.8	26.5	2.3	18.3	16.3	2.0	149.5	186.1	▲36.6	19.0	14.0	5.0	170.3	164.4	5.9
9月	上旬	19.5	19.0	0.5	26.4	25.2	1.2	12.7	13.6	▲0.9	15.5	28.7	▲13.2	4.0	3.8	0.2	79.6	59.6	20.0
	中旬	15.6	15.5	0.1	21.9	21.6	0.3	9.5	10.3	▲0.8	43.5	50.8	▲7.3	5.0	4.6	0.4	45.9	46.1	▲0.2
	下旬	13.4	13.9	▲0.5	21.0	20.6	0.4	7.2	8.3	▲1.1	14.0	27.7	▲13.7	1.0	4.0	▲3.0	81.1	55.7	25.4
平均または合計		16.2	16.1	0.1	23.1	22.5	0.6	9.8	10.7	▲0.9	73.0	107.2	▲34.2	10.0	12.4	▲2.4	206.6	161.4	45.2
10月	上旬	11.9	11.2	0.7	17.3	16.8	0.5	6.8	6.4	0.4	37.0	49.6	▲12.6	6.0	5.4	0.6	42.3	39.5	2.8
	中旬	9.4	8.3	1.1	16.3	14.1	2.2	1.7	3.2	▲1.5	54.5	36.9	17.6	5.0	5.5	▲0.5	56.1	43.6	12.5
	下旬	8.4	6.3	2.1	14.4	11.8	2.6	2.4	1.6	0.8	35.5	37.4	▲1.9	5.0	5.6	▲0.6	41.2	42.2	▲1.0
平均または合計		9.9	8.6	1.3	16.0	14.2	1.8	3.6	3.7	▲0.1	127.0	123.9	3.1	16.0	16.5	▲0.5	139.6	125.3	14.3

注1) 比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。

2) ▲は平年に比べて低または減を示す。

表3 農耕期間積算値（5月～9月）

期間	項目	平均気温 （℃）	降水量 （mm）	降水日数 （日）	日照時間 （hr）
	本年	2,786.5	606.5	67	938.1
5月上旬 ～	平年	2,686.3	589.2	62	892.0
	比較	100.2	17.3	5	46.1

注1) 比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。

2) ▲印は平年に比べて低または減を示す。

2. 作 況

1) 各作物の耕種概要

各作物の耕種概要は下記の通りである。

表 4 畑作物の耕種概要

作物名	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	1 株 本数 (本)	播種 粒数 (粒/m ²)	株数 (株/10a)	施肥量 (kg/10a)				
							N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥
秋まき小麦	ひまわり	30	—	—	255	—	4.0+6.0+4.0	10.0	6.0	2.5	—
春まき小麦	ソルガム	30	—	—	340	—	9.0	16.2	10.8	4.5	—
大豆	ばれいしょ	60	20	2	—	8333	1.8	13.2	9.0	4.2	—
小豆	—	60	20	2	—	8333	3.0	12.0	7.0	2.5	—
ばれいしょ	大豆	75	30	—	—	4444	7.5	15.0	10.5	3.8	—

注1) 小豆は前年明らかに作付のない箇所への設置となったため、前作物は「—」とした。

2) 前作物において、ばれいしょ以外は緑肥としての作付。

3) 秋まき小麦のN施肥量は、基肥+起生期+止葉期。

2) 各作物の作況

(1) 水 稲：良

播種は平年より4日遅い4月19日に行った。出芽の揃いは良好であった。移植は平年より1日遅い5月20日に行った。移植時の草丈は平年に比べ並から1.1cm短く、第1葉鞘高は並から0.2cm長かった。葉数と茎数はほぼ平年並であった。苗100本当たりの地上部乾物重は、「ななつぼし」では平年より0.34g軽く「ゆめぴりか」では0.12g重かったが、苗の充実度を示す地上部乾物重/草丈はいずれの品種とも平年並であった。

移植後の5月下旬が低温寡照で経過したため、生育は停滞した。その後6月上旬および中旬の気温は平年並から高かったものの、6月20日の草丈および葉数は平年並で、茎数は平年より19～23%少なかった。

6月下旬から7月中旬の気温が平年並からやや高く経過したため、生育は回復した。幼穂形成期は平年より1～2日遅く、止葉期は平年並から1日遅く、出穂期は平年並から1日遅かった。7月20日の草丈は平年並からやや長く、主稈の止葉葉数は平年並、茎数は平年並から8%少なかった。

7月下旬以降の平均気温は平年並から高く経過し、

登熟は順調に進んでいる。成熟期の稈長および穂長は平年並で、穂数は9～10%少なかった。

8月下旬の平均気温は平年より高く、登熟期間の平均気温は高かったため、成熟期は平年並から2日早く、登熟日数は1～2日短かった。稈実歩合は「ななつぼし」で平年より2.4ポイント低く、「ゆめぴりか」で0.9ポイント高かった。一穂粒数は平年より12～14%多く、m²当たり稈実粒数は平年並からやや多かった。登熟歩合は平年より0.7～4.2ポイント高かった。

精粒重は平年比107～115%であった。屑米歩合は「ななつぼし」で平年より0.1ポイント低く、「ゆめぴりか」で0.9ポイント高かった。精玄米千粒重は両品種とも0.8g重く、またm²当たり稈実粒数および登熟歩合がいずれも平年並から上回っていたことから、精玄米重は「ななつぼし」が75.0kg/a、「ゆめぴりか」が73.1kg/aで、各々平年比110%、117%と多収であった。玄米の検査等級は「ななつぼし」が1等、「ゆめぴりか」が1等下でいずれも平年より優った。

これらのことから、本年の作況は「良」である。

表5 水稻の生育および収量

品種名			ななつぼし			ゆめぴりか		
項 目 / 年 次			本年	平年	比較	本年	平年	比較
生育期節	播種期 (月・日)		4.19	4.15	4	4.19	4.15	4
	移植期 (月・日)		5.20	5.19	1	5.20	5.19	1
	幼穂形成期 (月・日)		6.24	6.22	2	6.24	6.23	1
	止葉期 (月・日)		7.09	7.09	0	7.09	7.10	△ 1
	出穂期 (月・日)		7.20	7.19	1	7.19	7.19	0
	成熟期 (月・日)		9.04	9.04	0	9.02	9.04	△ 2
	穂揃日数 (日)		8	8	0	8	8	0
	登熟日数 (日)		46	47	△ 1	45	47	△ 2
	生育日数 (日)		138	142	△ 4	136	142	△ 6
移植時	草丈 (cm)		13.2	14.3	▲ 1.1	14.0	14.2	▲ 0.2
	葉数 (枚)		4.2	4.1	0.1	4.2	4.2	0.0
	茎数 (本/m ²)		154	147	7	146	155	▲ 9
	第1葉鞘高 (cm)		2.4	2.4	0.0	2.6	2.4	0.2
	地上部乾物重 (g/100本)		4.32	4.66	▲ 0.34	4.78	4.66	0.12
	地上部乾物重/草丈		0.33	0.33	0.00	0.34	0.33	0.01
本田生育	葉数 (枚)	6月20日	8.0	8.1	▲ 0.1	8.5	8.4	0.1
		7月20日	10.0	10.1	▲ 0.1	10.8	10.5	0.3
		止葉葉数	10.0	10.1	▲ 0.1	10.8	10.5	0.3
	茎数 (本/m ²)	6月20日	415	538	▲ 123	490	611	▲ 121
		7月20日	719	719	0	770	839	▲ 69
	草丈 (cm)	6月20日	39.8	41.5	▲ 1.7	39.3	38.6	0.7
		7月20日	90.6	85.1	5.5	85.7	84.3	1.4
成熟期	稈長 (cm)		71.9	69.4	2.5	67.4	66.2	1.2
	穂長 (cm)		17.4	16.8	0.6	17.6	16.9	0.7
	穂数 (本/m ²)		608	673	▲ 65	713	783	▲ 70
収量構成要素	一穂粒数 (粒)		57.7	50.8	6.9	48.0	43.0	5.0
	m ² 当たり粒数 (×100)		351	340	11	342	336	6
	稈実歩合 (%)		93.3	95.7	▲ 2.4	93.9	93.0	0.9
	m ² 当たり稈実粒数 (×100)		327	325	2	321	312	9
	同上記 (%)		101	100	1	104	100	4
	登熟歩合 (%)		89.7	89.0	0.7	88.1	83.9	4.2
	粒摺歩合 (%)		82.3	81.1	1.2	79.0	78.7	0.3
	屑米歩合 (%)		1.7	1.8	▲ 0.1	4.5	3.6	0.9
	精玄米千粒重 (g)		23.2	22.4	0.8	23.5	22.7	0.8
収量	藁重 (kg/a)		75.0	65.3	9.7	69.0	62.6	6.4
	精粒重 (kg/a)		89.4	83.3	6.1	91.0	79.3	11.7
	精玄米重 (kg/a)		75.0	68.1	6.9	73.1	62.7	10.4
	屑米重 (kg/a)		1.3	1.2	0.1	3.4	2.4	1.0
	収量平年比 (%)		110	100	10	117	100	17
	検査等級 (等)		1	1下	—	1下	2中	—

注1) 平年値は前7か年中、令和元年（最凶年）、平成29年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

3) 育苗耕種概要 育苗様式：成苗ポット苗

施 肥：成苗培土Hを約1.43 (kg/箱) 充填、
成分量 N 0.5、P₂O₅ 1.0、K₂O 0.8、MgO 0.2 (g/箱)、
置床 N 25.0、P₂O₅ 0.0、K₂O 5.0 (g/m²)

4) 本田耕種概要 栽植密度：25.3株/m² (33.0cm×12.0cm)、3本植

施 肥 量：N 8.0、P₂O₅ 9.7、K₂O 6.9 (kg/10a)、堆肥 0 (kg/10a)

5) 精玄米千粒重および精玄米重：網目1.90mm以上、水分15%換算。

（２）秋まき小麦：良

9月中旬の降雨の影響を受け、播種は平年より6日遅い9月22日に行った。播種の遅れを反映して出芽も平年より4日遅く、10月20日時点での葉数および茎数は平年を下回ったが、越冬前の茎数は平年を上回った。

平年と比較して、根雪始は2日、根雪終は1日遅く、積雪期間は1日短い136日であった。雪腐病発病度はかなり低く、越冬茎歩合はやや高かった。融雪以降は気温が平年並から高く推移し、出穂期は平年より

6日早かった。草丈は平年を上回って推移したが、茎数は5月下旬の低温・寡照による減少が大きく平年並となった。成熟期も平年より4日早かった。

稈長は長く、穂長は平年並で、穂数は有効茎歩合が高かったことから平年をやや上回った。平年より千粒重が軽く、蛋白質含有率もやや低かったが、子実重は平年をかなり上回った。容積重は平年並であり、検査等級は1等であった。

これらのことから、本年の作況は「良」である。

表6 秋まき小麦の生育および収量

品 種 名		きたほなみ		
項 目	年 次	本 年	平 年	比 較
播種期（月・日）		9.22	9.16	6
出芽期（月・日）		9.30	9.26	4
出穂期（月・日）		5.29	6.04	△ 6
成熟期（月・日）		7.12	7.16	△ 4
越冬茎歩合（％）		110.1	106.7	3.4
雪腐病発病度		3.1	17.3	▲ 14.2
葉数（枚）	令 5年10月20日	3.3	4.3	▲ 1.0
草丈 （cm）	令 5年10月20日	12.9	18.0	▲ 5.1
	令 6年 5月20日	54.0	42.7	11.3
	令 6年 6月20日	94.2	88.4	5.8
茎数 （本/㎡）	令 5年10月20日	411	633	▲ 222
	令 6年 5月20日	1051	916	135
	令 6年 6月20日	564	562	2
成熟期	稈長（cm）	85	78	7
	穂長（cm）	8.6	8.6	0.0
	穂数（本/㎡）	559	452	107
子実重（kg/10a）		740	515	225
同上平年比（％）		144	100	44
容積重（g/L）		833	842	▲ 9
千粒重（g）		40.4	42.5	▲ 2.1
蛋白質含有率（％）		8.5	9.2	▲ 0.7
検査等級（等）		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、収穫年における令和5年（最豊年）、平成30年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(3) 春まき小麦：良

播種は平年より1日早い4月17日に行った。播種後、平年より気温が高く経過したことから、出芽期は平年より4日早かった。その後も生育は順調に進み、出穂期は平年より3日、成熟期も平年より2日早かった。

稈長は平年並であるが、穂長はやや長く、穂数は

やや多かった。登熟期間はほぼ平年並みであったが、穂数が多かったことから、子実重は平年比119%と多収であった。蛋白質含有率と千粒重は平年並で、容積重は平年よりやや軽かった。検査等級は平年並の1等であった。

これらのことから、目下の作況は「良」である。

表7 春まき小麦の生育および収量

品 種 名		春よ恋		
項 目	年 次	本 年	平 年	比 較
播種期 (月・日)		4.17	4.18	△ 1
出芽期 (月・日)		4.28	5.02	△ 4
出穂期 (月・日)		6.15	6.18	△ 3
成熟期 (月・日)		7.24	7.26	△ 2
草丈 (cm)	5月20日	28.8	21.9	6.9
	6月20日	84.6	80.2	4.4
茎数 (本/m ²)	5月20日	897	650	247
	6月20日	686	752	▲ 66
成熟期	稈長 (cm)	91	93	▲ 2
	穂長 (cm)	9.4	8.3	1.1
	穂数 (本/m ²)	558	508	50
子実重 (kg/10a)		531	447	84
同上平年比 (%)		119	100	19
容積重 (g/L)		810	824	▲ 14
千粒重 (g)		38.2	38.7	▲ 0.5
蛋白質含有率 (%)		11.6	11.5	0.1
検査等級 (等)		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、平成29年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(4) 大 豆 : 良

播種は、平年より1日遅い5月20日に行った。播種後の5月下旬は平年より低い気温で推移したため、出芽期は平年より5日遅かった。6月上旬以降、気温が平年並から高く推移したため、開花期は平年より1日早かった。生育は順調に進み、平年に比べ、主茎長はやや長く、分枝数と着莢数はやや多く推移した。なお、7月23日から24日にかけての豪雨により

試験区の一部が倒伏した。9月上旬以降、降水量は少なく推移したため、成熟期は平年より2日早かった。

百粒重は32.0gと平年より軽く、屑粒率は3.1%とやや多かったが、子実重は479kg/10aで平年比119%と多かった。検査等級は2等中であった。

これらのことから、本年の作況は「良」である。

表8 大豆の生育および収量

品 種 名		ユキホマレ		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月・日)		5.20	5.19	1
出芽期 (月・日)		6.04	5.30	5
開花期 (月・日)		7.11	7.12	△ 1
成熟期 (月・日)		9.15	9.17	△ 2
主茎長 (cm)	6月20日	15.5	13.5	2.0
	7月20日	57.9	54.9	3.0
	8月20日	60.1	59.0	1.1
	9月20日	60.2	58.3	1.9
	成熟期	60.2	58.3	1.9
主茎節数 (節)	6月20日	4.1	3.8	0.3
	7月20日	10.1	9.5	0.6
	8月20日	10.0	10.2	▲ 0.2
	9月20日	10.1	10.1	0.0
	成熟期	10.1	10.1	0.0
分枝数 (本/株)	7月20日	7.4	5.7	1.7
	8月20日	7.3	6.4	0.9
	9月20日	7.3	6.1	1.2
	成熟期	7.3	6.1	1.2
着莢数 (個/株)	8月20日	102	81	21
	9月20日	106	75	31
	成熟期	106	75	31
子実重 (kg/10a)		479	404	75
同上平年比 (%)		119	100	19
百粒重 (g)		32.0	33.9	▲ 1.9
屑粒率 (%)		3.1	1.6	1.5
検査等級 (等)		2中	2中	—

注1) 平年値は前7か年中、令和5年(最豊年)、令和3年(最凶年)を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(5) 小 豆：やや良

播種は平年より1日早い5月23日に行った。5月下旬が低温だったため出芽期は平年より1日遅かったが、その後は平年並から高温で推移し、開花期は平年より1日早かった。地上部生育は順調に進み、特に7月下旬以降は気温が平年並から高く推移し、土壌水分も十分であったことから、平年と比較して主茎長はかなり長く、本葉数および分枝数はやや多く、

莢数は多かった。成熟期は、8月の気温が高く推移したことから平年より6日早かった。

登熟期間が短かった影響を受け、百粒重は平年よりやや軽く、倒伏も発生したが子実重は平年比106%であった。検査等級は平年よりやや劣る3等上であったが、屑粒率は平年より低かった。

これらのことから、本年の作況は「やや良」である。

表9 小豆の生育および収量

品 種 名		エリモショウズ		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月・日)		5.23	5.24	△ 1
出芽期 (月・日)		6.09	6.08	1
開花期 (月・日)		7.22	7.23	△ 1
成熟期 (月・日)		9.04	9.10	△ 6
主茎長 (cm)	6月20日	5.5	5.0	0.5
	7月20日	30.4	26.3	4.1
	8月20日	83.1	60.5	22.6
	成熟期	87	67	20
本葉数 (枚)	6月20日	1.4	0.9	0.5
	7月20日	9.4	8.0	1.4
	8月20日	13.5	12.6	0.9
主茎節数 (節)	成熟期	14.1	13.5	0.6
分枝数 (本/株)	7月20日	5.8	5.7	0.1
	8月20日	6.8	6.0	0.8
	成熟期	6.6	6.0	0.6
着莢数 (個/株)	8月20日	84	60	24
	成熟期	68	54	14
子実重 (kg/10a)		357	336	21
同上平年比 (%)		106	100	6
百粒重 (g)		12.9	13.7	▲ 0.8
屑粒率 (%)		1.8	4.5	▲ 2.7
検査等級 (等)		3上	2中	—

注1) 平年値は前7か年中、平成29年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”を示す。

(6) ばれいしょ：やや良

植付けは平年より1日遅い5月10日に行った。その後、5月中旬の気温が高く推移したことから萌芽期は平年より1日早く、開花始も1日早かった。6月上旬以降、気温が平年並から高く推移し、適度な降雨もあったことから地上部生育は旺盛となり、茎長は平年より長かったがやや徒長気味であった。7月中旬以降は、気温が高く、降水量および日照時間は平年と比較して極端な多少があったが、枯ちょう期は平年より1日早い程度であった。

上いも数および上いもの平均重は平年並であったがわずかに平年を上回り、規格内いも重は平年比106%であった。でん粉価は、7月中旬の高温・少雨と6月下旬から7月中旬までの日照時間が平年並から多かった影響を受け高く推移した。一方、7月下旬にまとまった降雨があった以降は土壌が湿潤な状態が続いたことから低下し、最終的には平年並であったが0.3ポイント上回った。

これらのことから、本年の作況は「やや良」である。

表10 ばれいしょの生育および収量

品 種 名		男 爵 薯		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
植付期 (月・日)		5.10	5.09	1
萌芽期 (月・日)		5.27	5.28	△ 1
開花始 (月・日)		6.21	6.22	△ 1
枯凋期 (月・日)		8.24	8.25	△ 1
茎長 (cm)	6月20日	34.8	30.8	4.0
	7月20日	55.2	45.6	9.6
上いも数 (個/株)	7月20日	8.6	8.6	0.0
	8月20日	10.4	9.9	0.5
上いもの 平均重 (g)	7月20日	69	72	▲ 3
	8月20日	97	98	▲ 1
上いも収量 (kg/10a)	7月20日	2624	2751	▲ 127
	8月20日	4492	4317	175
でん粉価 (%)	7月20日	15.2	14.0	1.2
	8月20日	14.8	14.7	0.1
収 穫 期	上いも数 (個/株)	10.7	10.3	0.4
	上いもの平均重 (g)	102	100	2
	上いも収量 (kg/10a)	4871	4582	289
	同上平年比 (%)	106	100	6
	中以上いも収量 (kg/10a)	4321	4071	250
	同上平年比 (%)	106	100	6
	規格内いも収量 (kg/10a)	3952	3723	229
	同上平年比 (%)	106	100	6
	でん粉価 (%)	14.6	14.3	0.3

注1) 平年値は前7か年中、令和4年（最豊年）、平成30年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

Ⅲ 試験研究及び地域支援活動

1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要

1) 水稻畑作グループ

水稻育種部門では、育種試験を担当して極良食味品種および良質糯品種の開発を行っている。

優良品種決定基本調査1年目で、対照品種を「ふっくりんこ」「きたくりん」として供試した「上育489号」は、出穂期は同等、成熟期は1日早く、いもち病抵抗性がかなり優る。「きたくりん」に比べ、出穂期、成熟期とも1日遅い。両品種に比べ、多収で玄米品質が良好。いもち病抵抗性が「きたくりん」並に強く、食味が良い。両品種に比べ割粳が多い。大きな欠点は認められないが、先行する「上育485号」と比較して収量、玄米品質が及ばないことなどから、現地試験には供試せず、基本試験を継続して先行系統との比較も含め検討を重ねる。

優良品種決定基本調査1年目で、対照品種を「きたふくもち」として供試した「上育糯490号」は「きたふくもち」に比べ、出穂期は2日、成熟期は3日遅く、「風の子もち」並に多収である。いもち病抵抗性が優り、割粳が少ない。玄米品質、もちの硬化性や食味は同等。「きたふくもち」の欠点である収量性が改善されており、試験を継続し、現地試験に供試する。

今年度の新配付系統はなかった。

畑作部門では、有望系統の上川地域における適応性の評価を行っている。令和6年度において、秋まき小麦「北見99号」（令和6年8月に「きたほなみR」として品種登録出願公表）が北海道優良品種に認定された。

2) 生産技術グループ

水稻の栽培技術開発、環境保全・土壌肥料に関する試験研究、病害虫に関する試験研究、新農業資材試験、発生予察事業、畑作物および園芸作物に関する優良品種決定試験や栽培法の試験ならびに地域支援活動を担当している。

栽培環境部門では「ばれいしょおよび直播てんさいに対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果」と「北海道耕地土壌の理化学性と炭素

貯留量の2023年までの推移」、「ばれいしょに対する液体微量要素複合肥料『ポテトール』の施用効果」の成果をとりまとめ、成績会議で指導参考事項となった。また、他農試と連携して「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査」、「農地管理実態調査」を、農研機構と連携して「寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査」を実施した。

病虫部門では「アスパラガスの枠板式高畝栽培システムの開発」や「きゅうりのホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策」を行い、「病害虫発生予察調査」では、水稻、小麦の病害虫、ヤガ類・コナガ・マメシクイガについて調査を行った。また、「農作物病害虫診断試験」では、担当管内の作物に発生した病害虫、生育不良等の原因について調査を行った。

園芸部門では、「葉菜類ボーレコールの冬季無加温栽培法と加工・貯蔵特性」の成果をとりまとめ、成績会議で指導参考事項となった。重点研究「持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化」について道南農試、花・野菜技術センター、北方建築総合研究所、工業試験場と共にオフグリッドの環境制御システムの開発などを行った。

地域支援活動は、地域農業技術支援会議として地域要望課題の収集を行うとともに、普及センターの支援要請や部会活動などに対して支援を行った。

2. 各グループの試験研究課題

1) 水稻畑作グループ

A 水稻品種開発

(1) 水稻品種開発事業Ⅱ (令和2～6年)

多様なニーズに対応し、北海道稲作の発展に貢献する、省力栽培が可能な品種、耐冷・耐病性が優れる高品質・極良食味、高品質糯品種、並びに収量性を向上させた業務・加工用水稻品種の早期育成を目指す。

(2) 「日本一の米どころ北海道」の実現へ向けた水稻新品種の開発促進 1. 極良食味で耐病性の強い多収品種の開発へ向けた選抜強化 (令和2～6年)

他産地に先駆けた先進的な取り組みが可能となる

品種の育成へ向け、中後期世代の選抜を強化する。

(3) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅴ期) 1. 直播・早生移植用多収および極多収スタンダード品種の開発強化 (令和6～10年)

(中央農試水田農業グループが実施主体)

初期世代において、収量性、耐病性、耐冷性等の選抜を強化し、極多収で農業特性や業務用炊飯適性に優れた系統、および直播適性を備えた早生で多収な系統の開発を促進する。

(4) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅴ期) 2. 温暖化と環境負荷の軽減に対応する多収で品質・食味の安定したプレミアム・ミドル品種の開発強化 (令和6～10年)

水稻の初期世代の選抜強化により、耐冷性、耐病性が向上し、品質・食味の高位安定した品種を開発する。

(5) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅳ期) 3. 極多収品種の育成に向けた多収要因の解明と素材開発 (令和元～5年)

現行品種より20%以上多収な各用途向け水稻極多収品種の開発を加速化させるため、収量性に関連する基礎的情報を収集し、極多収素材の開発を行う。水稻有望系統の多収性を評価し、栽培特性として整理する。

(6) 「ダントツ日本一」の産地を目指す北海道もち米品種の開発促進 (令和4～8年)

既存品種より10%以上多収、耐冷性“強”、葉いもち抵抗性“やや強”以上を目標にもち米品種の開発を促進させる。

(7) 「ゆめぴりか」のブランド力強化に向けた戻し交配による形質改良系統の育成 (令和2～6年)

「ゆめぴりか」のブランド力強化のため、「ゆめぴりか」として販売できる形質が改善された従属品種の開発に向け、戻し交配と薬培養によりタンパク質含有率が0.3～0.5ポイント低下し、穂いもち圃場抵抗性を1ランク以上向上させるなど「ゆめぴりか」の欠点を改良した系統を育成する。

B 水稻優良品種決定試験

(8) 優決 水稻(優決基本相当)

(昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、当地における適応性を検討する

(9) 優決 水稻(優決現地相当)

(昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、現地における適応性を検討する。

C 新優良品種普及促進

(10) 水稻新優良品種普及促進事業

(昭和42年～継続)

新品種の速やかな普及を図るために有望系統の種子の増殖を行う。

D 水稻農業資材試験

(11) 水稻除草剤及び水稻生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

直播用剤3点について、実用化試験を行う。

E 畑作物品種開発(麦類)

(12) 畑作物の地域適応性検定試験(秋まき小麦・春まき小麦、優決基本相当)

(昭和29・34年～継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北見・北見春番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(13) 春まき小麦の品種選定試験 1. 適応性試験(優決基本相当)、3. 特性検定試験(4) 栽培特性(初冬まき) (令和3～7年)

ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統(HW番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、初冬まき適性を評価する。

(14) 二条大麦の品種選定試験 1. 適応性検定基本試験(優決基本相当) (令和3～5年)

サッポロビール(株)育成二条(ビール)大麦有望系統(札育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(15) 畑作物の地域適応性検定試験(秋まき小麦・春まき小麦、優決現地相当)

(平成15年・平成13年～継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)、北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北見番号)、ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統(HW系統)について、現地試験による上川地域への適応性を検定する(令和6年は北見・北海番

号の供試系統なし)。

(16) 優決 麦類(秋まき小麦・二条大麦、優決現地相当) (昭和33年～継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)、北見農試育成秋まき小麦有望系統、サッポロビール(株)育成二条大麦有望系統(札育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和6年はすべて供試系統なし)。

(17) 気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進(第3期) 2) 地域の生産および品質安定に向けた障害・病害抵抗性と収量性の選抜強化(3) 耐雪性の選抜強化①雪腐褐色小粒菌核病抵抗性の検定強化・③春まき小麦の初冬まき栽培特性検定、(6) 地域の気象条件に対応した系統の選抜強化②上川地域への適応性の評価(系適相当) ア) 春まき小麦・イ) 秋まき小麦

(令和4～6年)

雪腐病抵抗性検定強化では、北農研センターおよび北見農試育成秋まき小麦のF4・小生予1年目・小生予2年目以降系統および有望系統(北系・北見番号)の発病程度を調査し、これを基に算出した発病度の基準品種との比較により抵抗性を判定する。初冬まき栽培では、北見農試育成春まき小麦有望系統(北見春番号)の初冬まき適性を評価する。適応性の評価では、北農研センター育成秋まき小麦有望系統(勝系番号)および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北系・北系春番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(18) 小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験 (令和6年)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(勝系番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、有望系統(北海・勝系番号)について、雪腐病抵抗性を判定する。

F 畑作物品種開発(豆類)

(19) 畑作物の地域適応性検定試験(大豆、優決基本相当) (平成26年～継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(20) 畑作物の地域適応性検定試験(小豆、優決基

本相当) (昭和34年～継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(21) 優決 大豆(大豆、優決現地相当)

(昭和33年～継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

(22) 優決 小豆(小豆、優決現地相当)

(昭和34年～継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和6年は供試系統なし)。

(23) 優決 菜豆(菜豆、優決現地相当)

(昭和38年～継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和6年は供試系統なし)。

(24) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化 (令和5～7年)

十勝農試育成の系統選抜(F5～F6)・小生予(F6～F7)系統および有望系統(十系番号)の茎疫病圃場検定を行い、中晩生小豆系統の抵抗性の評価および選抜を行う。

G 畑作物品種開発(根菜類)

(25) 畑作物の地域適応性検定試験(馬鈴しょ、優決基本相当) (平成19年～継続)

北農研センターおよび北見農試育成有望系統(北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(26) 優決 馬鈴しょ(馬鈴しょ、優決現地相当)

(昭和42年～継続)

北農研センターおよび北見農試育成有望系統(北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和6年は北海番号の供試系統なし)。

(27) 馬鈴しょ輸入品種等選定試験 1) 生産力検定試験(馬鈴しょ、優決基本相当)、2) 現地試験(馬鈴しょ、優決現地相当) (令和3～7年)

海外導入品種、ホクレン農総研およびカルビーポテト(株)育成有望系統(HPおよびCP番号)につ

いて、生産力その他諸特性の調査並びに現地試験による上川地域への適応性を検討する（令和6年は導入品種の供試なし）。

（28）てん菜輸入品種検定試験（てん菜、優決現地相当）（令和元～5年）

北農研、ホクレン、北糖および日甜育成または導入系統（北海、H、HTおよびKWS番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する（令和5年は北海番号の供試系統なし）。

H 畑作農業資材試験

（29）新資材（畑作関係除草剤および生育調節剤）の実用化（昭和45年～継続）

除草剤2点（春まき小麦およびそば）について、実用化試験を行う。

2）生産技術グループ

A 水稻栽培法改善試験

（1）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（Ⅳ期） 3）「品種特性にあわせた省力・低コスト栽培技術の確立（令和6～10年）

「そらきらり」の収量性を重視した生産に向け、マット苗における省力・低コスト栽培技術と窒素施肥法を開発し、栽培適地マップを提示する。また、有望系統における省力・低コスト栽培の適応性を評価する。

（2）多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（Ⅳ期） 4）収益性と環境負荷軽減を考慮した持続的生産技術の開発（令和6～10年）

収益性確保の観点から、水稻のリン酸とカリを対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。また、地力評価と簡易土壌診断による施肥対応技術を開発する。

B 畑作物栽培法改善試験

（3）気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第3期） 3）-（1）春まき小麦における肥料価格変動に応じた適正施肥量の設定と秋まき小麦「北見95号」のタンパク安定化技術の開発（令和4～6年）

収益性確保の観点から、春まき小麦のリン酸とカリを対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

（4）畑作物に対する肥効調節型肥料の施用効果試験（令和4～6年）

畑作物に対する、被覆肥料を活用した省力かつ環境負荷軽減のための施肥法の代替技術を開発する。

（5）肥料価格変動に応じたばれいしょ適正施肥量の設定（令和5～7年）

収益性確保の観点から、ばれいしょのリン酸およびカリを対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

C 土壌保全・環境保全・土地改良に関する調査

（6）環境保全型有機質資源施用基準の設定調査（平成10年～継続）

農業の基盤である土壌環境の経年的変化を総合的に把握し、適切な土壌管理のための基礎資料を得る。

（7）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）（令和3年～継続）

農家ほ場を対象として、土壌炭素蓄積量及び有機物施用、作物残渣の鋤込み等による土壌炭素の維持蓄積に寄与すると考えられる農地管理を調査する。

（8）農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理技術検証） 寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査（令和3～6年）

水田における栽培管理による温室効果ガスの削減を定量化するため、移植栽培よりも試験事例が少なく、湛水期間が短い直播栽培において中干しおよび秋耕によるメタン削減量を調査する。

（9）農業農村整備事業等に係る土壌調査（昭和40年～継続）

道営土地改良事業計画地区の土壌断面及び理化学性を調査し、改良対策と工種導入時の留意点を示す。また、整備事業の効果を把握するため、整備による土壌改良効果と作物収量の関連を検討する。

D 病虫害試験

（10）農作物病虫害生理障害診断試験・緊急対策試験（令和2～6年）

突発的に発生する病虫害や栄養生理障害による被害を回避するため、それらの診断と対応策を提示する。併せて、道内で新たに発生した病虫害の情報を記録し蓄積する。

（11）病虫害発生予察調査（昭和16年～継続）

植物防疫法に基づいて、病虫害の発生予察法の確

立を図るとともに、発生予察情報を関係機関に提供して病虫害防除の適正を図る。

(12) 気象・画像データを用いた病虫害防除の効率化 (令和5年)

画像解析によりフェロモントラップの捕獲虫を遠隔から自動計測する技術を開発する。また、気象条件から作物の生育ステージにあわせて薬剤散布時期を判断するツールを開発する。

(13) アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「枠板式高畝栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発 北海道におけるアスパラガス枠板式高畝栽培システムの適性評価 (令和2～6年)

露地栽培において「枠板式高畝栽培システム」の特性を評価し、本システムの特徴を活用した疫病対策としての有効性を評価する。

(14) きゅうりホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策の確立 (令和5～8年)

施設栽培きゅうりにおけるホモプシス根腐病に対する道内産転炉スラグおよび土壤還元消毒の効果を確認し、適用条件および施肥対応指針を策定する。

E 畑作物品種開発（豆類）

(15) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化 (令和5～7年)

茎疫病圃場抵抗性 DNA マーカーの有効性を検証することで、小豆品種を早期に開発・普及し、道産小豆の安定供給に努める。

(16) 小豆の障害抵抗性に優れる品種開発促進

(令和4～6年)

小豆の有望系統および育成系統のアズキ茎疫病レース3・レース4およびアズキ萎凋病に対する抵抗性を明らかにする。

F 野菜類品種開発

(17) 長期どり可能な春どりいちご系統の品種化

3) 地域適応性検定 (令和6～8年)

「ゆきララ」並の果実品質を有する多収品種を開発する。

G 野菜栽培法改善

(18) 持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化 (令和4～6年)

圃場内で太陽光発電した電力を用いて、環境制御を効果的かつ安定的に行うシステムを構築する。

(19) 近未来の社会構造の変化を見据えた力強い北海道食産業の構築 新規道産野菜の加工・流通技術の開発 (令和2～6年)

良食味なケール的一种であるボーレコールを冬期無加温ハウスにおいて、長期にわたり安定供給する生産加工流通体系を構築する。さらに、冬期無加温での他の品目（こまつな、ほうれんそう、わさび菜など）への展開も行う。

(20) アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究 (令和5～7年)

青果物用鮮度保持技術「アダプティブ MAP システム」について、道産ブロッコリーの国内流通における鮮度保持効果、利用条件および導入効果を明らかにする。

(21) 養液栽培技術の高度化となすにおける活用技術の開発 (令和6～8年)

果菜類養液栽培における簡易な給排水モニタリングおよび日射比例灌水システムを開発し、なすの養液栽培技術と適正な水分管理指針を示す。

H 農業資材試験

(22) 除草剤・生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

アスパラガスに対する除草剤の北海道における実用性を確認する。

(23) 殺菌剤・殺虫剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

各種病虫害に対する新規農薬32点の防除効果を検討し、その実用化を図る。

(24) 肥料・土壌改良およびその他資材

(昭和45年～継続)

馬鈴しょ葉面散布材を検討し、その実用性を確認する。

L 革新的技術導入による地域支援

(25) 道北地域における水稻高密度播種短期育苗技術の導入支援 (令和5～6年)

上川北部、留萌の現地圃場において「えみまる」による高密短技術の評価を行い、そのメリットを示すことで道北地域における高密短技術の導入促進を図る。

3. 地域支援活動

1) 地域農業技術支援会議

地域農業技術支援会議は、地域農業が抱える課題に迅速に対応するため、農試・普及センター・振興局が一体となって協働により課題解決を図る体制として各振興局ごとに設置されたものであり、課題の把握と集約、対応方策の策定、役割分担と合意形成、実証試験等の実施と成果とりまとめ、検証、評価、普及などを行うこととしている。

本年度の活動として、上川支援会議では、事務局会議（5月8日、1月14日）、四者会議（2月12日）、を開催し、必要な調査等を進めた。また、成果を地域に還元する地域関係者会議を開催した（6月6日）。本年度収集した要望課題は1課題（そば畑における赤クローバー混播播種量）であった。

留萌支援会議では、事務局会議（7月18日、12月24日）、スマート農業勉強会（8月29日 プロジェクト課題）、四者会議（1月29日）、地域関係者会議（3月7日）を行った。本年度収集した要望課題は7課題（コスト低減対策、畑作物収量向上、直播もち品種開発、スマート農業の推進、水稻早熟省力多収良食味品種開発、高温耐性米開発、「きた

ふくもち」に代わる新品種）であった。前年度要望に基づくプロジェクト課題として実施したものは1課題（管内一円でのスマート農業の推進）で、関係機関と共に勉強会を行った。

2) 道北地域農業技術センター連絡会議（NATEC）

上川、留萌、宗谷管内における自治体や生産者団体、民間企業が設置した調査研究・研修機関の情報交換の場としてNATECが設置されている。本年度は幹事会（6月26日：和寒町、1月17日：メール）現地検討会（8月22日、サカタのタネ 北海道研究農場）、地域情報交換会・総会（2月21日 web）等の活動を行った。

3) 上川水稻直播ネットワーク

上川管内における水稻直播栽培技術の普及啓蒙を図る目的で活動を行った。事務局を上川農試が担い、事務局会議（5月16日、10月8日メール開催）、理事会（6月19日、11月13日）、夏期情報交換会（7月10日）、冬期情報交換会・総会（12月19日）を開催した。

IV 試験研究の成果と普及

1. 技術普及に移された成果

1) 普及奨励事項

なし

2) 普及推進事項

なし

3) 指導参考事項

(1) ばれいしょおよび直播てんさいに対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果（十勝農試生産技術 G、上川農試生産技術 G、北見農試生産技術 G）

ばれいしょおよび直播てんさいに適用可能な非プラスチック性肥効調節型肥料の施用効果を明らかにした。

(2) 多雪地帯のアスパラガスハウス立茎栽培における枠板式高畝栽培システムの適用性（花野菜セ花野菜 G、上川農試生産技術 G、農研機構他）

枠板式高畝栽培システムを用いたアスパラガスのハウス立茎栽培は、欠株が発生せず、疎植でありながら同等以上の規格内収量が得られ、収穫作業負担も軽減され、収穫 1 年目から貢献利益がプラスになることを明らかにした。なお本研究は生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業（JPJ007097）」の支援を受けて実施した。

(3) 葉菜類ボーレコールの冬季無加温栽培法と加工・貯蔵特性（上川農試生産技術 G、中央農試農産品質 G）

ボーレコールの冬季無加温栽培において 9 月上旬定植で 12 月下旬まで収量 2t/10a が得られ、収穫前 2 週間の最低気温の平均を 1℃以下に管理することで上位葉 Brix 糖度 12%以上が得られ、収穫後の雪中貯蔵により 42 日間品質を維持可能であることを明らかにした。

(4) 北海道耕地土壌の理化学性と炭素貯留量の 2023 年度までの推移（中央農試環境保全 G、中央農

試生産技術 G、上川農試生産技術 G、道南農試生産技術 G、十勝農試生産技術 G、北見農試生産技術 G、酪農試飼料生産技術 G、酪農試天北支場地域技術 G）

道内耕地土壌では心土がち密な地点、低 pH・ケイ酸不足の地点、交換性カリや有効態リン酸が基準値を超える地点が依然として多いものの推定減肥可能量は減少したこと、30cm 深土壌炭素貯留量は平均 111.2 t/ha で、泥炭土での減少傾向が伺われたこと、全道耕地面積 114 万 ha では 4.8 億 t-CO₂ と推定され、堆肥施用による炭素貯留効果は高いこと、を明らかにした。

(5) アゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤の株元施用によるアスパラガス疫病防除対策（上川農試生産技術 G、花野菜セ花野菜 G、農研機構他）

近年道内で発生しているアスパラガス疫病にはアゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤の 12kg/10a 株元散布の効果が高く、萌芽期前後と 9 月下旬～10 月上旬の 2 回散布を行うことにより、未発生圃場と同等の収量が得られることを明らかにした。本研究の一部は生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業（JPJ007097）」の支援を受けて実施した。

(6) ばれいしょに対する液体微量要素複合肥料「ポテトール」の施用効果（上川農試生産技術 G、十勝農試生産技術 G）

ばれいしょに「ポテトール」を開花始期から 10 日おきに 3 回の葉面散布することにより、茎葉部の苦土濃度が増加し、生育と収量は対照区と同等以上となり、でん粉価の増加が見込まれることを明らかにした。

4) 研究参考事項および行政参考事項

なし

2. 論文ならびに資料

1) 研究論文、試験成績

著者名	論文名	学会誌名	号数	頁	発行年
Ruka Kawasumi・Megumi Nagahama・Keisuke Katsura・ Motoaki Tokjo	First report of Aphanomyces cochlioides causing damping off of quinoa	J. of General Plant Pathology (Disease Note)	91	126-130	2024
小谷野茂和、櫻井道彦、新村昭 憲、西脇由恵、谷藤健、杉川陽 一、福川英司	北海道における秋まきコムギ有機栽培のための 安定確収技術	日本土壤肥料科 学雑誌	95	322-327	2024
岡元英樹、地子 立、高濱雅 幹、古山真一	無加温パイプハウスにおける野菜周年作付け体 系への連続不耕起栽培法の導入	北農	91	300-307	2024
古山真一、岡元英樹、地子 立	第一章 葉根菜類の厳冬期無加温生産技術の開 発	北海道立総合 研究機構農業 試験場資料 第 45 号	45	32-38	2024
佐々木大介	第二章 冬野菜の品質とその管理技術 第五節 冬野菜の虫害	北海道立総合 研究機構農業 試験場資料 第 45 号	45	68-74	2024

2) 口頭・ポスター発表

発表者名(所属)	発表名	発表場所	開催地	開催期間
野田智昭	北海道産サツマイモってどんなん？	第2回さつまいも交流 会	札幌市	6/28
熊谷聡	北海道の湛水直播水稻におけるアクリル樹脂スプ レーを用いた精密な葉齢調査法	日本土壤肥料学会福岡 大会	福岡市	9/3-9/5
中村隆一	北海道におけるリン・カリ等の土壤養分蓄積実態	日本土壤肥料学会福岡 大会シンポジウム	福岡市	9/3-9/5
古山真一	北海道のパイプハウスにおける環境制御技術	施設園芸新技術セミ ナー・機器資材展 in 北海道	札幌市	10/30- 10/31
野田智昭、松岡祐樹、杉本顕、 引地達也、武田貴宏	アダプティブMAPシステムを用いたブロッコリー輸 送試験	園芸学会令和6年秋季 大会	沖縄県中 頭郡西原 町	11/3-11/4
古山真一	DIYによる低コスト型統合環境制御でトマトをたく さんとうろう！	令和6年度ホクレン担 い手セミナー	web	11/13
古山真一	DIYで低コスト化！やってみよう！パイプハウスの 統合環境制御	ふらの未来農業エキス ポ2024	富良野市	11/22
野田智昭	道内におけるさつまいも栽培	ふらの未来農業エキス ポ2024	富良野市	11/22
栢森美如、八木亮治、小川ひか り、前塚研二	消石灰に代わる安全なナガイモの青カビ病防除法 の検討	北海道園芸研究談話会	札幌市	12/1
中村隆一、笛木伸彦	道内農耕地作土の土壤炭素含量と変動要因の検討	日本土壤肥料学会北海 道支部秋季大会	旭川市	12/5
竹内悠真、中村隆一、熊谷聡、 笛木伸彦	水稻無カリ連用栽培における収量およびカリ吸収 量の変動と土壤非交換態カリの減少	日本土壤肥料学会北海 道支部秋季大会	旭川市	12/5
笛木伸彦	クリーン農業が目指す土壤健康のこれまでとこれ から	日本土壤肥料学会北海 道支部公開シンポジウ ム	旭川市	12/5
古川勝弘	コオロギ飼育における農産廃棄物（野菜類、きの こ廃菌床）の利用可能性について	令和6年度北海道応用 動物・昆虫研究発表会	札幌市	1/23
佐々木大介	帰化植物エニシダに寄生するエニシダトゲマダラ アブラムシ（仮称）の国内初発生	令和6年度北海道応用 動物・昆虫研究発表会	札幌市	1/23
野田智昭	暖房無しで冬に作れる甘くて美味しいゆきあま ケール	冬期無加温ハウス野菜 導入セミナー(上川総 合振興局)	旭川市	2/21

(つづき)

発表者名(所属)	発表名	発表場所	開催地	開催期間
野田智昭	北海道産サツマイモの貯蔵・加工特性と栽培技術の改善	ホクレン担い手向けWEB研修(さつまいも)	WEB	3/12
松岡祐樹、梶田路津子、野田智昭	北海道産セイヨウカボチャにおけるMA包装貯蔵の歩留まりおよび品質への影響	園芸学会令和7年春季大会	藤沢市	3/20-3/21
渡辺慎一、地子立、高濱雅幹、長浜恵、栢森美如	北海道での殺菌剤無散布条件下の露地春どり栽培における茎枯病抵抗性アスパラガス'あすたまJ'の生育・収量特性	園芸学会令和7年春季大会	藤沢市	3/20-3/21
桂恵輔、川澄留佳、長浜恵、東條元昭	<i>Aphanomyces cochlioides</i> および <i>Aphanomyces</i> sp.によるキヌア苗立枯病(新称)	日本植物病理学会	高松市	3/26-3/28

3) 専門雑誌、著書・資料

著者名(所属)	タイトル/書籍名	雑誌名/発行者	号数・ISBN	頁	発行年
古山真一	複合環境測定装置を自作し施設園芸への導入費用節約	ニューカントリー	11月号	58-59	2024
中村隆一	水稻「えみまる」の窒素施肥	ニューカントリー	11月号	64-65	2024
古山真一	北海道の野菜づくり(複合環境制御)	北海道協同組合通信社	9784864531030	33-36	2024
古山真一	北海道の野菜づくり(なす)	北海道協同組合通信社	9784864531030	91-94	2024
野田智昭	北海道の野菜づくり(冬季葉菜類)	北海道協同組合通信社	9784864531030	246-253	2024

4) 新聞等記事

著者名(所属)	タイトル	新聞等名	発行日
古山真一	パイプハウスの統合環境制御による省力多収技術	農業共済新聞	4/17

5) 印刷刊行物

名称	発行日	頁数	配布先
令和5年度(2023)上川農業試験場年報	10/10	31	簡易製本で場内配布、およびホームページにて公開

3. 研修生の受入

1) 普及指導員研修

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
令和6年度新技術伝達研修(上川)	2/7	WEB	—	上川農業改良普及センター職員	生産技術G
令和6年度新技術伝達研修(留萌)	2/7	WEB	—	留萌農業改良普及センター職員	生産技術G

2) 学校教育研修・職場体験学習

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
拓殖大学北海道短期大学学生研修	6/12	上川農試	75	教員、学生	研究部長、各G
旭川農業高校インターンシップ	7/16-18	上川農試	1	2年生生徒	研究部長、各G
旭川工専インターンシップ	8/19-23	上川農試	1	第4学年学生	研究部長、各G
比布中央学校農業インタビュー	8/27	上川農試	16	比布中央学校7学年 (中1)、教員	研究部長
比布中央学校職場体験学習	9/19	上川農試	2	比布中央学校8学年 (中2)	研究部長、各G

3) JICA 研修等

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
「天水稲栽培・種子生産及び品種選定技術」コースに係る研修	9/5	上川農試	10	ガーナ、マラウィ、ウ ガンダ等アフリカ7カ 国	尾崎研究主幹

4) その他

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	概要
上川管内農業改良普及センター所 長・支所長会議視察研修	6/21	上川農試	19	普及センター所長、支 所長、上川技術普及 室、上川総合振興局	場概要説明、圃場視察

4. 技術相談及び技術指導

1) 技術相談

内容	相手方	月日	回答方法
トマト芽かき時のほさみ消毒方法	生産者団体	4/2	電話
環境制御技術について	民間会社・機関	4/3	メール
環境制御技術について	行政・地域指導機関	4/10	web
トマト病害かどうか	農改普及センター	4/15	メール
温湿度センサーについて	学校・学生・生徒	4/18	メール
ぶどうの施肥対応について	民間会社・機関	4/19	電話
米の食味とミネラルの関係について	農改普及センター	4/23	口頭
牛舎の環境制御について	農改普及センター	4/25	web
直播でんさい栽培について	生産者団体	5/14	電話
水稲直播における種子のプライミング処理について	農改普及センター	5/24	メール
カボチャの皮が固い理由	民間会社・機関	5/27	メール
水稲直播におけるピリミノバックメチル含有除草剤の播種同時処理効果について	農改普及センター	5/28	メール
水稲冷床育苗法について	報道機関	6/4	メール
なすの栽培について	生産者・生産法人	6/4	口頭
ぶどうの無核化について	一般市民	6/7	口頭
ゆめびりかの系譜等について	一般市民	6/10	電話
てんさいの減肥について	生産者団体	6/12	電話
農業をテーマにしたチーム課題の立案について	大学・公的研究機関	6/12	口頭
環境制御技術について	民間会社・機関	6/14	メール
水稲の交配方法と北海道における交配育種開始年代について	一般市民	6/17	電話
野良イネに対する除草剤による防除について	農改普及センター	6/18	メール
水稲白化症状について	農改普及センター	6/28	メール
デントコーンのリン酸欠乏	民間会社・機関	7/1	電話
水田雑草の同定について	生産者・生産法人	7/12	メール
MAフィルムを用いたブロッコリーの流通について	行政・地域指導機関	7/23	メール
なすの栽培について	生産者・生産法人	7/25	口頭
コシヒカリの出穂について	報道機関	8/1	電話
カボチャのうどんこ病の調査方法	農改普及センター	8/9	メール
エンドウのコウガイケカビ病	農改普及センター	8/9	その他
水田土壌の窒素施肥について	農改普及センター	8/15	口頭
転換畑の排水改良について	農改普及センター	8/16	口頭
果樹園の土壌診断について	行政・地域指導機関	8/19	電話
糯団地における水稲WCS品種の選定について	農改普及センター	8/23	メール
サツマイモの分析方法について	大学・公的研究機関	8/29	その他
建設残土除去後の農地回復について	民間会社・機関	8/30	口頭
さつまいもの味覚分析について	民間会社・機関	9/2	メール
ぶどうの病害について	一般市民	9/6	電話

(つづき)

内容	相手方	月日	回答方法
枝豆について	生産者・生産法人	9/13	電話
さつまいものパネルチェック	民間会社・機関	9/13	メール
水稻密播中苗栽培の耐倒伏性について	農改普及センター	9/17	メール
馬鈴しょの交雑について	農改普及センター	9/19	電話
キュウリの生理障害について	生産者・生産法人	9/19	口頭
水稻白未熟粒の調査法について	民間会社・機関	9/25	メール
カーランツの植え方について	農改普及センター	9/27	電話
玉ネギのエチレン貯蔵について	民間会社・機関	9/30	電話
ブロードキャスターを用いた水稻WCS播種について	農改普及センター	10/4	メール
スイートコーンを加害するチョウ目幼虫の種類について	農改普及センター	10/15	その他
残渣すき込みに伴う有機物分解について	大学・公的研究機関	10/18	口頭
熱水抽出性窒素について	大学・公的研究機関	10/18	口頭
環境制御技術について	民間会社・機関	10/20	電話
堆肥製造の問題点について	民間会社・機関	10/21	口頭
サツマイモの簡易キュアリングについて	大学・公的研究機関	10/24	電話
可変施肥技術の実用化について	大学・公的研究機関	10/25	メール
北海道のさつまいもについて	報道機関	10/28	WEB
ミニトマト農薬散布の付着量	大学・公的研究機関	10/29	メール
ゆめぴりかの食味について	大学・公的研究機関	11/7	電話
冬期栽培ケールの販売について	生産者・生産法人	11/13	その他
水稻「そらきらり」専用肥料銘柄の開発に向けた意見交換	生産者団体	11/14	口頭
旭川のさつまいもについて	報道機関	11/14	来訪取材
米の脂肪酸度の変動要因について	農改普及センター	11/18	メール
ボーレコールの栽培について	報道機関	11/21	電話
ボーレコールの販売単価について	民間会社・機関	11/22	メール
空知地域、岩見沢における「えみまる」の普及状況について	報道機関	12/3	電話
ボーレコールの購入について	民間会社・機関	12/3	メール
ケールの冬期無加温栽培について	報道機関	12/6	来訪取材
冬期無加温栽培について	報道機関	12/10	来訪取材
ゆきあまケール（ボーレコール）冬期無加温栽培にて	行政・地域指導機関	12/10	来訪取材
「ゆめぴりか」育苗中の徒長について	生産者・生産法人	12/12	電話
冬期無加温栽培について	報道機関	12/13	電話
冬季無加温栽培ケールについて	報道機関	12/13	来訪取材
ゆきあまケールの流通時期について	一般市民	1/14	電話
そばの訪花昆虫の発生生態について	行政・地域指導機関	1/15	メール
野菜のMA包装について	農改普及センター	1/15	電話
水稻湛水直播における施肥について	民間会社・機関	1/23	口頭
「そらきらり」専用肥料の試作について	生産者団体	1/23	メール
大豆の蛋白含有率について	生産者・生産法人	1/28	電話
水稻有機栽培技術について	大学・公的研究機関	1/29	メール
北海道における冬期間の野菜栽培・貯蔵および出荷について	報道機関	2/2	web取材
水稻作況調査について	行政・地域指導機関	2/12	口頭
スイートコーンのチョウ目幼虫対策について	農改普及センター	2/17	口頭
北海道の水稻白未熟粒について	民間会社・機関	2/18	メール
井戸水の白濁について	行政・地域指導機関	3/3	電話
北海道水稻品種の宮城県での2期作の可能性について	生産者・生産法人	3/3	電話
A1・Feを含む水の灌水利用について	行政・地域指導機関	3/4	電話
はくちょうもち等柔らかさが持続するもち米について	一般市民	3/5	電話

2) 技術指導

内容	相手方	月日	合同対応機関
環境制御機器製作ワークショップ	行政・地域指導機関	4/4	
下川町環境制御機器製作ワークショップ	行政・地域指導機関	4/8	
アスパラガス高畝栽培高畝の作成方法	農改普及センター	4/30	
トマト病害かどうか	生産者団体	5/31	
病害虫の診断依頼の閲覧について	行政・地域指導機関	6/5	
旭川工業高等専門学校本科第4学年授業「創造演習Ⅱ」における農業指導	農改普及センター	6/12	
シャインマスカットジベレリン処理講習会	農改普及センター	6/14	旭川市農業センター
ハイコヌカグサ、ドジョウツナギの防除法について	民間会社・機関	6/18	
いもち罹病株の譲渡	行政・地域指導機関	7/2	
トマト病害かどうか	行政・地域指導機関	7/9	
水稻直播におけるドローン活用について	行政・地域指導機関	7/16	

(つづき)

内容	相手方	月日	合同対応機関
SMCMM培地作成指導	行政・地域指導機関	7/22	
日高農改園芸担当者会議での環境制御技術指導	行政・地域指導機関	7/22	
Fo-G1培地の作成指導	農改普及センター	7/29	
水稲「そらきらり」視察研修について	行政・地域指導機関	8/19	
水稲直播栽培に関する視察研修について	生産者・生産法人	8/22	
高温年での水稲栽培におけるケイ酸質資材の重要性について	農改普及センター	8/23	
水稲省力栽培技術の視察研修について	行政・地域指導機関	8/26	
上川農試における水稲研究の視察研修について	行政・地域指導機関	8/29	
水稲「そらきらり」視察研修について	行政・地域指導機関	8/30	
環境制御に係る技術指導	民間会社・機関	9/13	
大豆品種について	行政・地域指導機関	9/15	
シャインマスカット栽培指導	行政・地域指導機関	10/1	
環境制御に係る技術指導	生産者・生産法人	10/7	
環境制御に係る技術指導	農改普及センター	10/8	
日中土壌肥料・作物栽培・スマート農業に関する学術交流（招聘）	行政・地域指導機関	10月12-19日	
環境制御機器製作ワークショップ	農改普及センター	10/22	
環境制御に係る技術指導	生産者団体	10/25	
ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫の検定に係る研修会	農改普及センター	10/30	上川農試技術普及室 上川農業改良普及センター
シャインマスカット剪定指導	行政・地域指導機関	11/26	
ケール栽培知見について指導	生産者・生産法人	12/10	
冬野菜マニュアル扱いについて指導	農改普及センター	12/20	
シャインマスカット剪定指導	生産者・生産法人	12/11	
Jクレジットにおけるメタンガス採取方法	行政・地域指導機関	1/23	
きゅうりホモブシス根腐病の意見交換	農改普及センター	2/14	上川農試技術普及室 上川農業改良普及センター本所
農家施肥設計について	農改普及センター	2/19	
(以下持ち込み診断)			
さつまいもの病変様症状	農改普及センター	4/9	
水稲苗の葉色黄化、2葉目付け根の白化	学校・学生・生徒	5/10	
ミニトマト葉の褐変	行政・地域指導機関	5/14	花野技セ
ミニトマト葉の褐変	生産者・生産法人	5/15	
小麦葉の黄化、かすり症状	行政・地域指導機関	5/20	中央農試予察G
トルコキキョウの萎れ、枯死	農改普及センター	5/20	花野技セ
コムギ縞萎縮病が疑われる症状	農改普及センター	5/21	中央農試予察G
ミニトマト葉の枯死	農改普及センター	5/22	
ばれいしょ萌芽不良	農改普及センター	5/24	
コムギ縞萎縮病が疑われる黄化症状(1)	農改普及センター	5/29	中央農試予察G
コムギ縞萎縮病が疑われる黄化症状(2)	農改普及センター	5/29	中央農試予察G
簡易軟白長ねぎの生育不全	農改普及センター	5/30	
コムギ縞萎縮病が疑われる症状	農改普及センター	6/10	中央農試予察G
小麦のドロオイムシおよび食害	農改普及センター	6/14	
なすの萎れ症状	農改普及センター	6/18	
ばれいしょの腰折症状	農改普及センター	6/26	
アスター茎葉の変色、萎れ	農改普及センター	6/27	花野技セ
醸造用ぶどうの枯れ上がり	農改普及センター	7/1	
春まき小麦のクビアカクビホソハムシの疑い	農改普及センター	7/3	
秋まき小麦の生育不良、立ち枯れ症状	農改普及センター	7/3	
はくさい、ブロッコリーの食害	農改普及センター	7/9	
トルコキキョウの褐色斑点	農改普及センター	7/9	

(つづき)

内容	相手方	月日	合同対応機関
ピーマン果実のイボ	農改普及センター	7/17	
大豆の縮葉	農改普及センター	7/23	
トマトの斑点、褐変	農改普及センター	8/2	花野技セ
ねぎの葉先枯れ等生育異常	農改普及センター	8/5	
トマト葉の食害痕	農改普及センター	8/8	
露地さやえんどうのかび発生	農改普及センター	8/9	
大豆の萎凋株	農改普及センター	8/21	
さやえんどうの黄化、根腐れ症状	生産者・生産法人	8/30	
ミニトマトの食害痕、幼虫の確認	農改普及センター	9/4	
トマト葉の食害痕、トマトキバガとみられる成虫確認	生産者団体	9/5	
ミニトマト株の萎れ、枯死	農改普及センター	9/17	
トマト葉の食害痕、作物体内および周辺の幼虫、 成虫確認	行政・地域指導機関	9/18	
きゅうり葉の異常（黄化、斑点等）	農改普及センター	9/19	
西洋なし果実の斑点	農改普及センター	9/19	
さつまいも葉の病変様症状	農改普及センター	9/19	
ミニトマト果実周辺の食害痕、糞の確認	農改普及センター	9/30	
ミニトマト葉の黄化、枯死、萎れ	農改普及センター	10/1	
ズッキーニ葉の褐変	農改普及センター	10/10	
ミニトマト生長点の萎縮、黄化	農改普及センター	10/17	
ミニトマト、中玉トマト果実に穴があく食害痕	農改普及センター	10/30	
大正金時選別ラインで虫を発見	農改普及センター	11/5	
黒大豆出荷先での虫の発生	農改普及センター	11/11	
大豆種子の黒ずみ	農改普及センター	1/27	

5. 講師等の派遣

講演会等の名称	依頼元	月日	担当者
水稻直播研究会現地研修会	妹背牛町水稻直播研究会	6/25	中村隆一
第2回さつまいも交流会	公益財団法人北海道科学技術 振興センター	6/28	野田智昭
北海道もち米懇談会	北海道もち米団地農協連絡協 議会	9/5	尾崎洋人
上川水稻直播ネットワーク冬期情報交換会	上川水稻直播ネットワーク	12/19	熊谷聡
第3回さつまいも交流会	公益財団法人北海道科学技術 振興センター	1/24	野田智昭
令和6年度 担い手向けWeb研修会（水 稲）	ホクレン	2/19	中村隆一
水稻直播研究会令和6年度成績検討会	妹背牛町水稻直播研究会	2/19	中村隆一
令和6年度地域農業づくり懇談会	北海道上川総合振興局	2/19	谷藤健
令和6年度 全肥商連北海道地区部会「肥 料講習会」	全肥商連北海道地区部会	2/21	中村隆一
令和6年度 全肥商連北海道地区部会「肥 料講習会」	全肥商連北海道地区部会	2/21	笛木伸彦
豆類の新品種	公益財団法人日本豆類協会	2/26	藤田涼平

6. 関連委員会・学会研究会役員

名称	機関名	担当者
日本土壌肥料学会部門長（第7部門：肥料・土壌改良 資材）	日本土壌肥料学会	笛木伸彦
Soil Science and Plant Nutrition, Editorial Comittee	Soil Science and Plant Nutrition, Editorial Office	笛木伸彦
日本生物環境工学会評議員	日本生物環境工学会	古山真一
北海道養液栽培研究会運営委員	北海道養液栽培研究会	古山真一
旭川工業高等専門学校運営懇話会委員	旭川工業高等専門学校	吉村 康弘

V 広報・場運営・その他

1. 広 報

1) 一般参観来場者

今年度の一般参観来場者数：294 名

2) 公開デー

開催日：令和 6 年 8 月 8 日（木）10:00～14:00

来場者：367 名

3) 新技術発表会「道北農業新技術 2025」

開催日：令和 7 年 2 月 28 日（金）13:00～16:00

場 所：当麻町公民館ホール

内 容：表 11 を参照

参加者：上川農試除き 65 名

表 11 「道北農業新技術 2025」の開催内容

講演タイトル	講演者
(1) 新品種・新技術トピックス	
コムギ縞萎縮病に強くなった！秋まき小麦新品種「きたほなみR」	藤田涼平
プラスチック被覆肥料に頼らない ばれいしょ・てんさいへの代替資材	中村隆一
暖房なしで冬に作る！甘くて美味しい「ゆきあまケール」	野田智昭
ラクなのに、しっかり穫れる！「枠板式高畝」で省力的なアスパラガス栽培	嶋倉直也 ¹⁾
アスパラガス疫病には株元2回散布！	長濱恵
食を育む北海道の耕地土壌の現状	笛木伸彦
令和7年に特に注意を要する病害虫	古川勝弘
(2) ポスターセッション(令和5年度に普及に移される新しい技術のうち、上記含め13課題)	
(3) 普及活動事例の紹介	
重点地区における秋まき小麦に施肥改善支援～気候変動に対応した窒素施肥管理	佐藤洋二 ²⁾
(5) 技術普及実証試験成果の紹介	内田哲嗣
道北は「えみまる」で安心 高密短で移植栽培も省力化	
(6) 地域農業技術支援会議の紹介	杉本昌隆 ³⁾
(7) 全体質疑	

¹⁾ 花・野菜技術センター、²⁾ 上川農業改良普及センター、³⁾ 上川総合振興局

4) マスコミ等への対応

取材日	取材者	掲載・放送	内容	対応者
5/27	NHK 旭川放送局	TBS 「家事エンス」	カボチャの皮が固い理由	野田智昭
12/10	読売新聞旭川支局	読売新聞1/24	冬期無加温栽培について	野田智昭
12/13	北海道放送旭川放送局	HBC 「今日ドキッ」 2/3 (ニュース枠)	冬季無加温栽培ケールについて	野田智昭
2/2	STV旭川支局	STVテレビ「どさんこワイド」 2/6	北海道における冬期間の野菜栽培・貯蔵および出荷について	野田智昭
3/5	NHK 旭川放送局	NHK道内ニュース3/5	冬期の温室における水稲の収穫（刈取り作業）について	森田耕一

5) イベント等への出席

名称	出展日	イベント名称	内容	開催地
令和6年度は該当なし				

2. 場運営

1) 場内委員会

(1) 構成

委員会名	委員長	副委員長	委 員 (f: 技術普及室職員、k: 組合推薦者)						
公開デー実行委員会	谷藤 健	内田哲嗣	伊東良浩	兼山幸記	樫村優	高橋春南	熊谷 聡	栢森美如	直井美幸 ^f
新技術発表会実行委員会	谷藤 健	内田哲嗣	森 光治	尾崎洋人	笛木伸彦	山岸修一 ^f	—	—	—
業務委員会	尾崎洋人	—	中川 諭	森田耕一	藤田涼平	藤田一輝	佐々木大介	兼山幸記	
図書・情報システム委員会	谷藤 健	堀川謙太郎	伊東良浩	佐々木瞭太	栢森美如	野田智昭	—	—	—
作況・気象委員会	藤田涼平	—	堀川謙太郎	高橋春南	—	—	—	—	—
公宅委員会	森 光治	—	伊東良浩	山岸修一 ^f	樫村 優	佐々木大介	—	—	—
安全衛生委員会	吉村康弘	—	谷藤 健	森 光治	尾崎洋人 ^A	笛木伸彦 ^E	熊谷聡 ^k	佐々木大介 ^k	藤田涼平 ^k
			古山真一 ^k	樫村 優 ^k	伊東良浩	本田愛花	A: 安全管理者	E: 衛生管理者	
入札参加指名選考委員会	吉村康弘	森 光治	谷藤 健	尾崎洋人	笛木伸彦	—	—	—	—
土壌病害対策委員会	谷藤 健	尾崎洋人	兼山幸記	木下雅文	藤田涼平	熊谷 聡	古山真一	長濱 恵	内田哲嗣
各種活動の分担 (* 遺伝資源連絡委員)	NATEC対応	谷藤 健 内田哲嗣	有機農業ネットワーク対応			長濱 恵 熊谷 聡			
	遺伝資源担当者	尾崎洋人* 藤田涼平	水稻直播ネットワーク対応			谷藤 健 内田哲嗣			
	北農会協力委員	谷藤 健	上川地域道総研連絡会議対応			内田哲嗣			

(2) 活 動

業務委員会では、圃場管理業務、環境整備業務等を効率的かつ円滑に遂行するため、毎週木曜日に業務委員会を開催した。

図書・情報システム委員会では、定期刊行物の受け入れ、ホームページの管理更新を行い、定期作況報告等を随時更新した。IT資産監視システム(SARMS)への登録、ネットワーク非接続の端末情報の定期収集・報告ならびに外部記憶媒体管理に係る作業を行った。

安全衛生委員会を毎月開催し、安全衛生対策に関する意見交換、職場巡回点検、注意喚起などを実施した。

2) 諸会議

(1) 運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として運営会議を開催した。開催日は4月17日、6月18日、8月21日、10月16日、12月20日、2月19日の6

回であった。

(2) 北海道農業試験会議に係る場内検討会

研究課題検討会議、秋まき小麦設計会議、成績会議及び設計会議に提出する試験研究課題について、それぞれ6月24日、8月28日、12月9日、2月3～4日に場内検討会を行った。

(3) 現地委託試験検討会議

農業改良普及センターへの委託試験(主に新品種選定に係る業務)検討会議を開催した。成績検討会議は11月29日(水稻)および12月2日(畑作)に、そして設計検討会議は3月26日に開催した。成績検討は対面とwebを併用したハイブリッド形式、設計検討はwebのみでの開催とした。

3) 職員の研修

(1) 道総研職員研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
古山 真一	新任主査級研修	R6/7/2～3	2	web
高橋 春南	研究課題立案研修	R6. 8. 28～29	2	web
森 光治、堀川 愛花	ハラスメント相談員研修	10月30日	1	web
野田智昭、藤田 一輝	道総研研究不正防止計画に基づく研究倫理研修	R6/5/7～5/31	-	eラーニング で実施
野田智昭、藤田 一輝、ほか非常 勤職員22名	道総研研究不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	R6/5/21～5/31 10/21	-	自習
吉村 康弘 ほか4名	安全衛生に関するトップセミナー	7月26日	1	web
笛木 伸彦 ほか3名	専門研修Ⅱ（日本土壌肥料学会2024年度福岡大会出席）	9月2～5/6日	4 ないし 5日	福岡市
吉村 康弘	令和6年度北海道職員「トップセミナー」	10月28日	1	web
吉村 康弘 ほか24名	冬道安全運転講習	11月18日	1	web

(2) 技術研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
樫村 優	金属アーク溶接等作業主任者限定技能講習	4月22日	1	旭川市
笹木 正志	新伐木作業（チェーンソー）の業務に係る特別教育	7/22～7/24	3	旭川市
熊谷 聡	化学物質管理者研修	7月26日	1	旭川市
野田 智昭	乾燥設備作業主任者技能講習	11/6～11/7	2	札幌市
中川 諭	ガス溶接技能講習	11/7～11/8	2	旭川市
中川 諭	アーク溶接等の業務に係る特別教育	11/12～11/14	3	旭川市
中川 諭	クレーン運転業務に係る特別教育	3/4～3/5	2	旭川市
中川 諭	高所作業車運転技能講習	3/13～3/14	2	旭川市
樫村 優				

(3) 職場研修

研修等名	内容	講師	実施日	受講者数
交通安全情報の周知	北海道警察からの情報を全職員にメールで周知	総務課	随時	29
非常勤職員雇入時研修	事務手続き、行動とモラル（セクハラ等を中心）、安全な農作業、土壌病害虫汚染防止、刈払機	総務課、研究部長、水稲畑作G（管理）	4月11日、 5月13日、7 月8日	23
場内参観リハーサル	各グループの研究課題内容と圃場試験配置について	各研究G担当者	6月4日	20
eラーニング研修	コンプライアンス、ハラスメント、アンガーマネジメント	㈱ビズアップ総研	4月23日～ 2月28日	29
交通安全研修	車に潜む死角、飲酒運転の危険性	日本自動車連盟札幌支部	9月5日	13
消防訓練及び救命講習	通報訓練、消火訓練、避難訓練、救命講習（AED講習）	大雪消防組合比布消防署	10月28日	39
情報セキュリティ・個人情報研修	情報セキュリティ及び個人情報保護に関する研修	法人本部	2月25～ 3月19日	33
交通安全研修	冬道の安全運転講習	桑園自動車学校	11月20日	29
情報セキュリティ・個人情報研修	情報セキュリティ及び個人情報保護に関する研修	法人本部	2月27～ 3月19日	29

(4) 学会発表等リハーサル

研究職員の学会発表やプレゼンを実施するのに先立ち、場内において事前の発表リハーサルを随時行った。

4) 表彰および学位授与

授賞日	件 名	受賞者	業 績
12/16	北農賞（報文）	長濱 恵	きゅうり褐斑病の耐性菌発生に対応した防除対策
12/20	植物調節剤功労者表彰	熊谷 聡	植物調節剤に関する検査・検定、研究開発及び普及啓発の顕著な功績

3. 自己点検への対応

リストNo.	項目	報告件数等	備考
0	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	
2	研究会等の開催件数	0	
3	展示会等への出展件数	0	
4	研究報告書の発行件数	1	
5	技術資料の発行件数	1	
6	その他紙媒体発行件数	0	
7	普及組織との連絡会議等開催件数	9	
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	0	
9	行政や企業等で活用された成果の数（農研本部で計数）	—	
11	設備使用の件数	0	
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	16	
13	研究会における公表件数	1	
14	学会誌等の掲載件数	14	
15	研究報告書での発表件数	0	
16	学会やシンポジウム等での発表件数	20	
17	電子媒体による公表件数	0	
18	プレスリリース、定例報道懇談会の件数	2	
19	学会役員・委員件数	5	
20	技術相談の件数	85	
21	技術指導の件数	81	
22	講師等派遣の件数	11	
23	技術審査の件数	0	
26	研修会・講習会の開催状況（件数）	4	
26	研修会・講習会の開催状況（人数）	217	
27	研修者の受入状況（件数）	5	
27	研修者の受入状況（人数）	95	
28	連携協定先との事業の実施件数	0	
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	9	
30	市町村との意見交換等の開催件数	0	
31	関係団体との意見交換等の開催件数	1	
32	道民意見把握調査の回答数	237	
33	出前授業の実施件数	0	
35	国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ）	0	
36	専門研修Ⅰの派遣件数	0	
37	専門研修Ⅱの派遣件数	4	
38	道民向けイベントの開催件数	1	
38	道民向けイベントの延べ来場者数	367	
39	国際協力事業等への協力件数	1	
40	災害等に関係した技術指導件数	0	
41	災害等に関係した委員派遣件数	0	
42	ホームページ発信・更新件数	10	
43	メールマガジン発信件数	0	
44	フェイスブック発信件数	0	
45	その他電子媒体発信件数	0	
46	職場研修開催件数	11	
47	安全衛生委員会等開催件数	12	
48	機器設備の点検状況	随時	
49	その他職場研修	随時	
50	グリーン購入の金額	1,279千円	
51	視察・見学者の受入件数	15	
51	視察・見学者の受入人数	294	

注）調査対象外の項目は除いた。

会議等の開催件数にはweb開催やメール会議となったものを含む。

本年報に記載した内容の無断転載、二次利用は固くお断りします。

令和 6 年度 上川農業試験場年報

令和 7（2025）年 1 0 月発行

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部上川農業試験場

〒078-0397 北海道上川郡比布町南 1 線 5 号

TEL 0166-85-2200 Fax 0166-85-4111 E-mail: kamikawa-agri@hro.or.jp